



興 照 寺 報

平成29年3月

62号

発行 浄土真宗 興 照 寺
〒890-0045 鹿児島市武一丁目25番12号
電話 099-254-3269 (代)FAX 099-254-0303



伊作峠の鹿児島紅梅

- 一面 青色青光
- 二頁 いのちの「終活」大切に
- 三頁 秋季永代経法話
報恩講話
- 四頁 行事案内・お願い

青色青光

昨年解散したS.M.A.P.の代表作に「世界に一つだけの花」という曲があります。

「No.1にならなくてもいい もともと特別なOnly one」花屋の店先に並んだいろいろな花を見ていった／ひとそれぞれこのみはあるけど／どれもみんなきれいだね／この中で誰が一番だなんて／争うこともしないで／バケツの中誇らしげに／しゃんと胸を張っている／それなのに僕ら人間は／どうしてこうも比べたがる？／一人一人違うのにその中で／一番になりたがる／そうさ 僕らは／世界に一つだけの花／一人一人違う種を持つ／その花を咲かせることだけに／一生懸命になれ ばいい／(中略) 小さい花大きな花／一つとして同じものはないから／No.1にならなくてもいい もともと特別なOnly one」

榎原敬之氏が作った曲ですが、お釈迦様がお浄土と阿弥陀仏を説かれた阿弥陀経の一節「青色青光・黄色黄光・赤色赤光・白色白光」との出会いによって生まれたと言われています。『青い花は青い花でよし、黄色い花は黄色い花でよし、赤い花は赤い花でよし、白い花は白い花でいい、そして、自分自身のままでもよし、自分以外の者にならなくていい、自分の花を咲かせればいい、自分の色で、少なくとも、ほとけさまは、そんな自分を、ちゃんと見ていてくださる、あなたかく、あたりまえに』(ひろ さちや氏の解釈)
金子みすゞさんの「みんなちがって みんないい」と同じ世界を持った歌だと思えます。そして「その様なお前を、そのまんま救う」という阿弥陀様の大慈悲心を頂ける歌だと思えます。
(英清記)

秋季永代経法要

講師 中山 和正 先生

佐藤愛子さんの著書に『老い力』があります。その中に「かつての老人は老後の幸せとして願ったものは心の平安と言うものではなかったか。それは今の自分に満足すると言う事ではなかったか。しかし、快樂を幸せと考えるようになった今、今の自分に満足することが難しくなってきた。老いてもなお衰えることのないエネルギーが、楽しい老後を追い求める心が増長する中で、やがて来る病と死の不安はあたかも慢性的な病気のように増えている」と言うような事を書いておられます。幸せの基準が違ってきたのです。

ある時、膝が痛くてたまらん、長く生きるのではなかったとおっしゃる方が居られました。死にたくないと努力して生きてきた私。その私の体が不自由になるその時まで私は生かされたのではないのですか。そのように受け取られる方が今の自分に満足する方です。体が動く間は良いけれども、それが楽しければ楽しいほど体が動かなくなつた時に私たちは辛くなります。病んで死んで行かなければならないという事実を目の前にした時、昔は良かったそれに引き換



え今は・・・と嘆かねばなりません。私たちはそういう不安を抱えて日暮しをしています。

「一切恐懼の為に大安を作さん」不安を抱えて生きている我々に大安を与えたいと言うのが阿弥陀様です。「死の因は生なり、死の縁は無量なり」と言います。生まれた以上は死んでいかねばならないと言う事を知りながら、その死の解決をつけないから常に不安の中にいるわけです。死を嫌い死んだらお終いと思つている我々に阿弥陀様は死の意義を変えてくださいました。死はお終いではなくお浄土で仏と生まれ生きていく事なんだ、「往生浄土」こそが死を抱え恐れ懼れている我々が一番安心して行ける道だと考えられ、「全ての者を浄土に迎え摂るぞ」と働く仏様になってくださいました。「我仏道成るに至りて名声十方に聞こえん。究竟して聞こえる所無くば誓いて正覚をならじ」と名前が声となる仏となるぞと誓つて下さったのです。

(英孝記)

報恩講法要

講師 木村 幸道 先生

私のこの命はどのように成り立っているでしょうか？

生まれるにあたっては、お父さんがいてお母さんがいて、おじいちゃんがいればあちゃんがいる。その先代をずっとたどつて、どなたか一人でも欠けていたら生まれるという事がなかった、そういう命です。

また、育つために生きるために、たくさんのお食糧を取らなくてはならない。食卓に上つた焼き魚が人間の言葉を喋れたら、「あなたに食べられるために生まれてきたわけじゃない」と言うかもしれない。魚だけではなく、お肉なら豚さんや牛さんや鶏さん、いろんな命をいただきながら生きているのが私たちです。私が生まれるために、生きるために、たくさんのお命が支えてくれている。でも、そういう命に私たちはお礼を言えていないでしょうか？両手を合わせ、合掌礼拝お念仏申すということは、すべての命のはたらきがありがとうございますとお礼を申し述べていけるということです。両手を合わせる時に、ああなりたいうなりたいうと、お願いしていくのではないのです。



人はひとり生まれ、ひとり死んでゆくと私たちは思つてしまいがちです。でも、「そんなに真つ暗ではない。間違ひなく、見えて下さる聞いて下さる、そして私たちのこの迷ひ苦しみのままに包み込んでくださる」と阿弥陀さまの事を私たちに伝えてくれたのが親鸞聖人です。

私たちが良い事をしたからとか、悪い事をしてしまったから、と選り取つていくのではなく、必ず救うと摂取不捨と働いてくださる。だから、いつ命が終わっても「間に合った」（仏となる身と定まった）と聞かせていただけるのです。いつでもどこでも何をしても、一人ではなく支えられ生きていく私なのです。それを有り難いと思えるのも、たくさんの人々や働きにそう思える人間に育てていただいたからです。その有り難いという気持ち「ありがとう」と語り伝えていく。それが報恩講というご縁なのです。(英之記)

(英之記)

春季彼岸法要のご案内

(〇の日時にあります)

三月	午前 十時より	午後 二時より
十七日(金)	〇	〇
十八日(土)	〇	吹上
十九日(日)	吹上	
二十日(月)	〇	〇
お中日	〇	〇

講師 市川 幸仏先生 (山口県)

春季永代経法要のご案内

・期日 四月二十二日(土)

四月二十三日(日)

・時間 朝席 十時より

昼席 二時より

・講師 渡辺 暁晃先生 (大分県)

※永代経志納を希望される方は、四月十五日までに寺へご相談ください。

〈永代経志納のお勤めは二十三日

(日)の昼席に行います〉

※ごなくても聴聞できます。気軽にご参加ください。



花祭り

・日 四月二日(日)

・時間 十一時より

・場所 興照寺本堂

(和順会総会も合わせて行います)

花祭り関係諸募集



■帰敬式参加者

《帰敬式とは法名を受ける式です。法名は本来生前に受けるものです。当寺では、毎年一回、花祭りの際に行っています。是非この機会にお受けください。》

■余興参加者

踊り・カラオケ・詩吟・楽器演奏等の参加者を募集します。ふるってご参加ください。

【帰敬式を受けたい方、余興参加希望の方は、三月二十六日(日)までにご連絡ください。】

お盆参りについてお願い

お盆のお参りについて、門徒会費の振込用紙を利用して皆様のご希望をお伺いいたします。(詳しくは同封別紙をお読みください。)

門徒会費のお願い

平成二十九年度の門徒会費納入をお願いいたします。

〈年額 二千元〉

■納入方法

① 同封の振込用紙を使い、近くの郵便局から振り込む。

② 寺へ持参される。

③ 命日などで、ご自宅へお参りに伺った際に預けていただく。(手数料は不要です)

■納付期限

五月末までにお願います。

「門徒会費」は、興照寺門徒としての自覚を持っていただくとともに、寺の運営活動の一助とする事を目的としています。また、会費納入者の名簿を基に年回法要等の案内も行っています。

彼岸に寺で納金される際は(彼岸中は寺の受付が混雑する場合があります)、懇志と区別して、「門徒会費です」と明示してください。また、領収の半券を忘れずにお受け取りください。

納骨堂管理費のお願い

納骨壇をお持ちの方につきましては、管理費の納入をお願いいたします。

金 額 年額 一万円

同封振込用紙に門徒会費・管理費の合計の金額が記入されていますので、門徒会費の納入方法と同じ要領でお願いいたします。

諸会会員を募集しています

■親厚会 (男性の親睦会)

毎月十七日十八時半より

「正信偈」のお勤め・法話・懇親会

婦人会 (女性の親睦会)

毎月十二日十二時より

「正信偈」のお勤め・法話・懇親会

どなたでもお入りいただけます。いずれの会もいつでも入れます。多くの方の参加をお待ちしています。詳しくは寺へお問い合わせください。

あ)とが)き)

「春一番が吹きました」とのニュースの後、「春一番」「春三番」とテレビで続けて紹介されました。何番まであるのでしょうか? 読売新聞の記事「春一番」によると「気象庁による認定はないが、春一番に続く強い南風のこと。春三番、春四番・・・と吹き、次第に春本番へと向かう」とのことです。(英憲記)